尾張陶磁（3）　－江戸前期の瀬戸物生産－

井　上　喜　久　男

はじめに

15世紀末以降（室町後期）の尾張陶磁についてはこれまで二回にわたって記してきたが、三回目の今回は近世の瀬戸物生産の続きとして江戸時代前期の瀬戸物生産を記すことにする。(注1)

江戸時代の尾張陶磁（瀬戸物）生産は、既に「尾張陶磁(2)」の中に編年を中心にしてその概要を記したとおり、江戸時代から明治時代までを登窯Ⅰ～Ⅹ期の十期に区分し、それを生産器種の消長から四段階（前期・中期・後期・幕末明治期）に大別して編年的展開過程を辿ることができる。(注2) 桃山時代から江戸時代末までの尾張陶磁（瀬戸物）は尾張・瀬戸窯と美濃・東濃窯(美濃窯)で焼かれ、現在、美濃焼として流通している東濃地方の陶磁器も、尾張藩管理地域のものは尾張藩物・瀬戸物として扱われていた。江戸時代の尾張陶磁は瀬戸窯と美濃窯の陶磁器が瀬戸物として流通したものである。瀬戸窯と美濃窯はそれぞれ独立した窯として展開過程を辿れることもできるが、両窯が尾張藩の管轄化におかれていたことから、両窯全体による器種的分業生産体制により生産されたものとなっている。尾張陶磁は瀬戸窯で生産される器種と美濃窯で生産される器種には違いが認められ、両窯での器種的競合を避けたものとなっている。さらに、瀬戸・美濃窯のそれぞれの内部では地区別に生産器種を変えている器種的分業がすすんでいる。

したがって、尾張陶磁生産は、尾張藩の管理のもとで瀬戸窯と美濃窯が一体の窯業地のようになり、地区別に立地する窯毎に器種を変えて生産を行なう瀬戸・美濃窯一体の器種的分業体制の上に成り立ち、四段階の展開過程を辿ることが考えられる。

江戸時代の尾張陶磁は瀬戸・美濃窯の大枠の中で四段階に編年的展開を辿ることから、瀬戸・美濃窯の窯別編年よりも段階別編年を優先し、江戸前期段階の編年を記して行くことにする。

1　瀬戸窯と瀬戸山離散

桃山時代の瀬戸窯は大窯Ⅲ期（1570－1580年）から衰退現象が始まり、その後の大窯Ⅳ～Ⅴ期（1580－1605年）の時期の窯跡が確認されない状態で、17世紀初頭まで衰退したことが認められる。

瀬戸窯の衰退現象については1967（昭和42年）頃より「瀬戸山離散」という言葉が用いられるようになったが、その意味する時代と現象は室町時代後期（15世紀末以降）に瀬戸の山中に立地していた中世窯（窖窯）が減少して山々から窯がなくなってしまったことを意味している。

しかし、その戦国期の現象はその後の調査研究により、山々から里の窯に移行することによる生産体制の変革期に当たったためであり、山々の窖窯は撤退したが、里の大窯へと転進して新しい器種の生産を開始して生産活動そのものは継続させていることが明らかになってきている。そのため、「瀬戸山離散」の言葉は戦国期の瀬戸窯の衰退現象と捉えると実情に合わないことになり、また、瀬戸窯の衰退現象としてその言葉を使用するとすると、対応させる年代が相応しいものと言えなくなっている。

従前の「瀬戸山離散」の言葉は15世紀末になって瀬戸の山々に立地した中世窯（窖窯）がなくなって、里の近世窯（大窯）に移っていった現象を窯業の衰退現象と誤認した結果の言葉であり、言葉の意味する衰退現象は大窯Ⅳ期から大窯Ⅴ期（1580－1605年）までの窯跡が確認されない短

い時期に該当させるのが適当である。

桃山時代の瀬戸窯は最近の調査研究においてもいまだに大窯Ⅳ～Ⅴ期（1580－1605年）に相当する窯跡が確認されない状況が続いている。江戸時代に入ってからの窯業生産の復興の状況から見ても、25年間ほどにわたる一時期に全く瀬戸の窯が生産活動を停止してしまったとは考えられない。四半世紀の間の空白のままであれば一世代に相当し、技術伝承の上からも断絶が生じることになり、何らかの活動を示す遺跡が残されていてもよさそうである。今日までの瀬戸窯における大窯の立地から見て、王子沢窯跡(注3)や寺本窯跡(注4)や赤津B窯跡(注5)のように斜面を工事により削除して窯体を立ち割り、崖の断面に露出した窯体の壁面により初めて確認するといったことが現実に存在することから、現在の集落地の中に埋没している可能性が僅かながらも残されている。

また、伝世品の中に瀬戸茶入が数多く存在しているが、現在確認している美濃窯の窯跡及び城館跡等の消費遺跡出土資料からでは編年的展開が辿れず、そのほとんどが考古学的に出土資料との対比による年代推定ができないものが多く、瀬戸窯での生産の可能性を残すものとなっている。

2　江戸前期の瀬戸物生産

江戸時代の尾張陶磁は桃山時代の美濃窯における生産活動を受けて、どのような展開過程を辿るのかが問題である。慶長５年（1600年）の関ケ原の戦いの後、天下は徳川家康の手中に握られ、尾張国は慶長12年に兄松平忠吉の絶家断絶の後、家康の九子義直に与えられ、義直は慶長13年には尾張一国を領するようになった。その後、慶長15年に名古屋城の着工により「清須越し」を経て江戸時代名古屋城における尾張国の統治となってから今日までの歴史を歩むことになる。

尾張藩は慶長15年に瀬戸窯の復興のために保護政策を打ち出し、美濃窯南部の中馬街道の筋の郷ノ木にいた加藤利右衛門・加藤仁兵衛を赤津に、水上から加藤新右衛門・加藤三右衛門を品野村に呼び戻している。(注6)

このことからも瀬戸窯の衰退状況が存在していることを推察させることにもなっている。その後、尾張徳川家の保護政策と瀬戸陶工達の努力によって瀬戸窯は次第にもとの生産活動に復興していくことになった。

一方、美濃窯は慶長５年頃から器物の造形に「ゆがみ」を取り入れた織部好みの陶器の焼成が開始され、慶長10年代からは連房式登窯という大量生産用の大形窯を用いて桃山文化の一翼を担う織部陶器の一群が生産されたのである。その後、美濃窯は瀬戸窯が復興して歩んでいく展開過程とは別に、織部陶器から御深井釉陶器、鉄釉・灰釉陶器生産へと独自の展開を示している。

これらの織豊政権から徳川政権へと移行する時代の転換期を経て、桃山文化から江戸文化への転換期に美濃窯は時代の寵児となり隆盛期を迎えていたが、瀬戸窯は瀬戸山離散期の衰退から復興しようとしていた時期であり、両窯がどのような生産活動を行ない、社会の変化に伴いどのように変化していったかを江戸前期（登窯Ⅰ～Ⅲ期・1605～1687年）の瀬戸物生産から見ていくことにする。瀬戸窯と美濃窯は大別して器種的分業体制が認められ、両窯の生産器種を総合することによって尾張陶磁（瀬戸物）の全体が摑めることになるが、今回は瀬戸窯について記していくことにし、基本的な器種について記すことにした。なお、第１～３図の実測図は瀬戸市歴史民俗資料館刊行の報告書から引用させていただいた。

（1）登窯Ⅰ期（1605－1623年・慶長10年～元和年間）

登窯Ⅰ期の時期は美濃窯においては織部陶器の生産期であり、瀬戸窯においては桃山時代からの瀬戸山離散の状態から脱却しようとした時期である。

瀬戸窯の生産は調査資料が不十分であり、美濃窯と編年的に対比して考える本期の後半期に該当せざるを得ない状況で、僅かに工事中偶然に発見された旧赤津村・赤津B窯跡の出土資料が存在するのみである。赤津B窯跡は愛知県瀬戸市赤津町に所在し、民家の横の丘陵斜面を利用して駐車場を作ろうとして基礎工事のために丘陵を掘ったところ、丘陵上面から2m下がったところから大窯形式の古窯が発見された。その古窯は丘陵斜面に平行するように築かれており、工事によって丘陵が掘られるまでは窯跡の存在は全く知られていなかった。この赤津B窯跡の発見によって、江戸時代の最も古い時期の窯の一つが確認されたことになり、不明確であった時期の窯跡の焼成品が採集されてその一端が明らかになった。採集されている器種は天目茶碗、鉄釉丸碗、長石釉鉄絵皿、長石釉鉄絵平鉢、黄瀬戸櫛目文平鉢、鉄釉片口鉢、鉄釉擂鉢、鉄釉徳利、鉄釉小瓶、茶入、水滴などである。

a　碗類

天目茶碗A（第1図1）17世紀初頭特有の大型化した深めの天目茶碗で、内面底部が広くなり、口縁部の立ち上がりが高く端部が外反する。底部は篦削り成形が施され、高台の側面の高さの半分ほど内側が削り込まれて輪高台になっている。高台は篦削りのままの表面となり、撫で仕上げがほとんど行なわれていない。高台脇の削り幅は狭く、水平又は削り込まれた状態のものが多い。

鉄釉丸碗A（第1図2）腰部が丸く、口縁部部にやや開いた形となるもので、口縁端部は丸く納められている。底部の成形は天目茶碗のそれと同じで、高台の形状も同様である。釉薬は底部を高台部分を残して掛けられ、さらに灰釉が二重に散らされている。

長石釉丸碗（第1図3）鉄釉丸碗よりも腰部が張りだし、体部が直線化しているもので、底部の削り出し高台等の整形は鉄釉のものと同様である。

鉄釉小杯（第1図5）底部から丸く開くもので、底部は削り込み高台である。

黄瀬戸小杯（第1図4）腰部で折れてから口縁へ直に開き、底部は削り出し輪高台である。

b 皿類

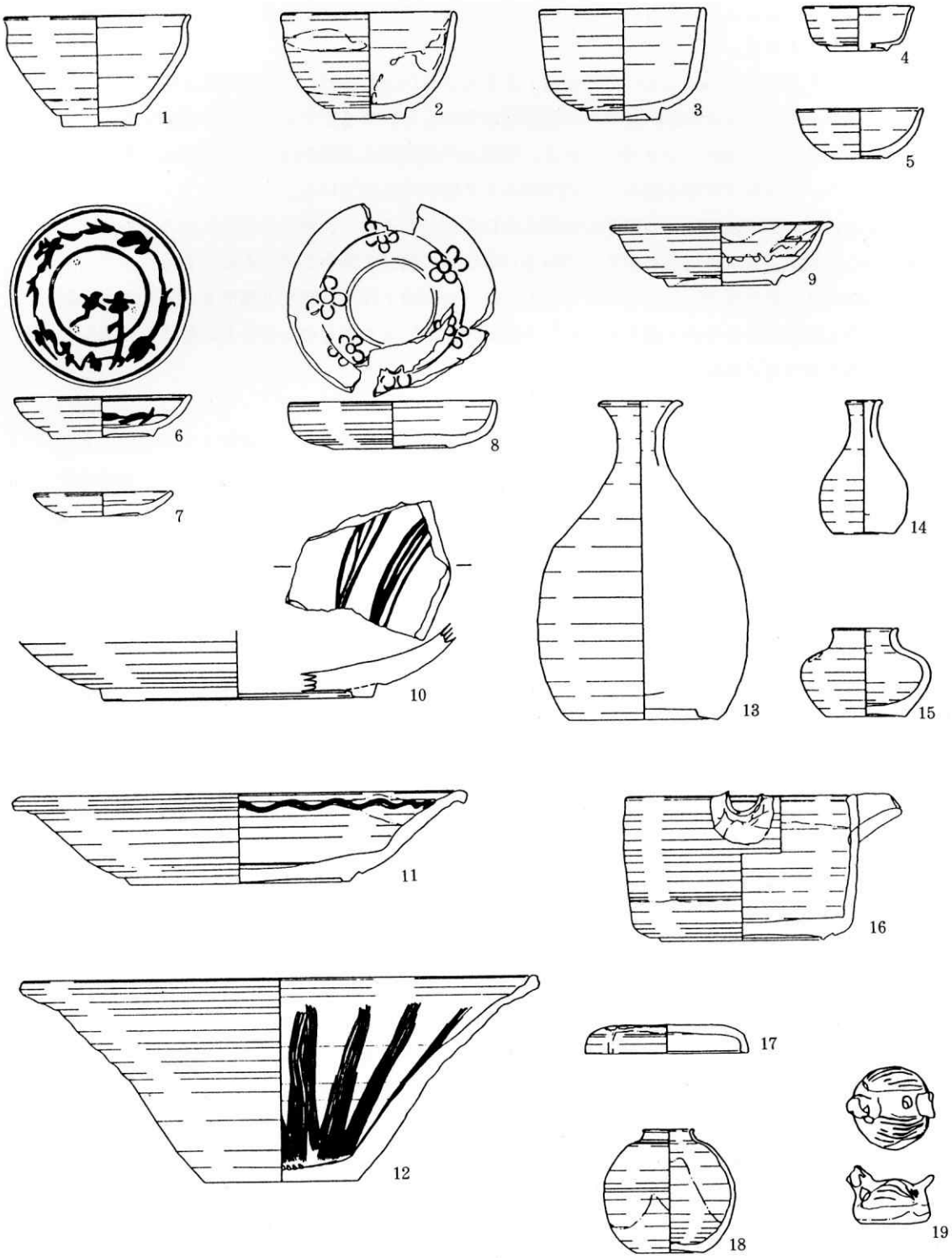
長石釉皿（第1図6.7）「志野丸皿」と呼ばれている小皿で、大小の二種類があり、大きい方は織部陶器の「志野織部」に分類される鉄絵が伴うものである。底部は外側面から底部まで轆轤回転の篦削りが施される。腰部は張り出し、高台は削りだしで低く、先端部が尖るものと端面を造るものがある。文様は上面に圏線を巡らして中央部と側面に唐草文などが描かれ、全体に長石釉が掛けられている。焼成は円錐ピンにより重ね焼きが行なわれ、内面底部にはピン先の痕跡が、高台内の底面には円形の痕跡が三個存在する。

灰釉印花文皿（第1図8）内面に梅印花文を施し、削り込み高台の小鉢状の皿で、向付用ものである。本期のみに存在する器種である。

鉄釉折縁皿（第1図9）口縁部が折れて縁帯となるやや深い皿である。

c 鉢類

長石釉鉄絵平鉢（第1図10）「大皿」とも分類されるもので、上面（内面）には鉄絵が伴う。口縁部は緩く外反するものと、緩く屈折するものがある。裏面の腰部から底部は轆轤回転の篦削り成形が施され、高台部の形状は天目茶碗や鉄釉丸碗と同様に低い台形状のものである。焼成は



第１図　登窯Ⅰ期の陶器　　1～19：赤津Ｂ窯跡出土

大型の円錐ピンにより重ね焼きが行なわれ、内面底部にはピン先の痕跡が、高台内の底面には円形の痕跡が存在する。

黄瀬戸櫛目文平鉢（第1図11）　「大皿」とも分類されるもので、上面（内面）には側面に櫛目波状文が、底面に櫛目圏線が施され、銅緑釉の筆散らしがある。裏面の成形は轆轤回転による成形が施される長石釉のものと同様である。焼成は内面底部に大形の団子トチを挟んで重ね焼きが行なわれ、内面底部に釉を剝がした四箇所のトチ跡が残されている。

鉄釉片口鉢（第1図16）　円筒形の体部に片口を付けたもので、底部の成形に削り込み高台と輪高台の二種がある。片口は半円形の円板をU字形に折曲げて接合させたものである。

鉄釉擂鉢A（第1図12）　轆轤水引き成形され、外側面と底部を篦削り整形されている。口縁部は内面に突起があるものと突起がなくなり端部がやや肥厚するものとがあり、形式的には口縁部が肥厚する方向に編年するものと考えられる。

d瓶類

鉄釉徳利A（第1図13）　前代の大窯V期の徳利は体部が球形に近く、細頸となる器形のものであるが、大窯Ⅲ期までの下ぶくれ形の形状を残した高さ19㎝前後のものものである。器形はやや長くなった胴張りの体部に口縁部が大きく外反する口頸部が付き、肩部で僅かに屈折する特徴があり、底部は削り込みの幅広い高台である。

鉄釉小瓶（第1図14）　小瓶は高さ7～8㎝の大形瓶と同様の器形であるが、口縁部の開きが少なく端部が外反し、底部が平底である。

eその他

水注（第1図15）　双耳と注口が付くもので、糸切り底の最後の形態である。

茶入（第1図17.18）　棗形茶入の蓋と丸壷形茶入がある。蓋は天井部は平らで合わせ口が短いものである。丸壷は胴紐があり、薄手である。

水滴（第1図19）　ふくら雀形の形象品で、頭部・羽・尾部頸部を貼り付けて付けられ、頸部と背部に孔が開けられている。釉薬は底部を除いて鉄釉が掛けられている。

（2）登窯II期（1624−1654年・寛永～承応年間）

寛永年間に入ると、前代の大窯形式の窯体から大形の連房式登窯が瀬戸に導入されて、瀬戸山離散状態にあった窯業が急激に復興する時期である。この時期の資料は旧水野村・穴田2号窯下層窯跡及び穴田2号窯跡出土資料を基準とするほか、旧瀬戸村で経塚山窯跡・日面窯跡・元十窯跡、旧赤津村では窯元A窯跡・赤津C窯跡、旧品野村では窯町A窯跡などで焼成している。焼成品種は天目茶碗・段付白天目茶碗・灰釉丸碗・長石釉鉄絵皿・灰釉輪ハゲ皿・黄瀬戸鉢・鉄釉片口・鉄釉擂鉢・筒形香炉・鉄釉徳利・長石釉鉄絵大鉢・鉄釉双耳壷などである。

a碗類

天目茶碗A（第2図1）登窯I期に大形化した天目茶碗は本期に入ると口縁部が発達し、立ち上がり部分が高くなり、口縁端部の外反が大きくなる。底部は轆轤回転による削り出し高台であり、さらに撫で仕上げが施されて削りによる面や角が丸く滑らかになっている。高台内は輪高台を際だたせるために高台際を深く削り込み、中心部が浅いため兜巾状に尖るものが多い。

段付白天目茶碗（第2図2）大形化した天目茶碗のなかに外側面の腰部に低い削りによる段が設けられた段付天目茶碗が出現する。口縁部に屈曲して立ち上がるようなアクセントが強く付け

られ口縁部が一端内傾してから端部で外反する。高台は轆轤回転のにより外開きに削りだされ、その後に撫で仕上げが施されている。瀬戸窯では長石釉が施された白天目茶碗のみが造られたが、美濃窯では鉄釉のものが中馬街道筋の大川窯で造られているのみである。

鉄釉丸碗A（第2図3）鉄釉の上に灰釉が二重掛けされたものと、鉄釉のみのものがある。共に高台が高く、撫で仕上げされた物で、灰釉丸碗のそれと同様の成形である。前者は体部の形が筒状のものと口縁が開くものがある。

灰釉丸碗A（第2図5）新しい碗である。腰が丸く、体部は筒形に近い形状になるもので、外側面の轆轤成形による凹凸が著しい。高台は高く、撫で仕上げが施され、高台内中央が兜巾状に尖る。釉薬は透明性が強く釉層が厚い灰釉が掛けられている。

灰釉丸碗B（第2図6）体部が筒状で口縁端部が外反する器形となる点に特徴があり、底部は露胎である。

長石釉小杯（第2図4）小形の丸碗の形態である。

灰釉小杯（第2図7）口縁部が外反する小形の杯である。

b 皿類

長石釉鉄絵皿（第2図8）登窯I期よりやや器高が低くなり、上面には蘭竹文の鉄絵が施され、圏線が施されるものとないものがある。後者のものが成形が粗雑になり器厚も厚くなり、編年的に後出するものである。焼成は円錐ピンにより重ね焼きされ、内面にピン跡が三個残っている。

灰釉輪ハゲ皿（第2図9）焼成の量産化と省力化のために直接重ね焼きをする方法として上面に輪状の突帯部を設けて釉着を防ぐ成形をしたものである。突帯内底面には菊印花文が施されたものがある。釉薬は底部上面の輪状突帯部を施釉後に掻き落し、底部は露胎のままである。

c 鉢類

長石釉鉄絵大鉢（第2図11） やや浅い大鉢で、上面に大きく一枝の芦の鉄絵が描かれている。外側面は篦削り成形が施されて、削り出し高台となり、口縁部は屈折して縁帯を形成する。釉薬は長石釉が掛けられ、内面に円錐ピンの跡が残っている。

黄瀬戸櫛目印花文鉢（第2図12） 長石釉の鉢よりも深いもので、口縁部が大きく外反する。口縁端部は隅丸となり、僅かに肥厚するものも存在する。口縁内側面には櫛目波状文が施され、底面には櫛目圏線とその中に菊印花文が施されている。焼成は円錐ピンと三足トチが使用され、内面底部には円錐ピンでは4個以上、三足トチでは4箇所に重ね焼き跡が存在する。三足トチは美濃窯において大形鉢の焼成に使用される窯道具であり、美濃窯との交流が考えられる。

鉄釉片口（第2図13） 円筒形の体部に片口が設けられたもので、片口の形状が先端を面取りしたものとなり、高台は輪高台に削り出されて、やや高くなる。片口の外表面は面取り状に整形されている。

鉄釉擂鉢A（第2図14） 全面に鉄銹釉が施されたもので、轆轤成形により大きく引き上げられ、外側面及び底面は篦削り成形されている。内側面には底部から櫛目が引かれて卸目となる。口縁部は直に引きだされ、端部が少し面取り状態に縁帯らしき形状になっている。その内側には稜線が現われ、折れて縁帯部に発達する兆しを見せている。

d 壺類

鉄釉双耳壺（第2図15） 円筒形の体部に広口が付いたもので、幅の狭い肩部に丸紐の耳が付

第２図　　登窯Ⅱ期の陶器

１・３・４・７・17：穴田２号窯跡出土
５・６・８～16：穴田２号窯跡床下出土
２：赤津Ｃ窯跡出土

けられている。底部は平底で、腰部が面取りされている。

e 瓶類

鉄釉徳利A（第2図17） 筒形状の体部に受け口状の口頸部が付く器形のものと、縦長の球状の体部にラッパ口に開く口頸部が付くものがあり、いずれも底は削り込み高台である。前者は織部徳利の影響が認められ、後者は染付磁器の影響が認められるものである。

長石釉徳利（第2図16） 縦長の棗形同部に細頸の口頸部となるもので、口縁部は外反し、底部は削り出し輪高台である。釉薬は全面に長石釉を掛け、肩から鉄流しが施されている。

f その他

香炉A（第2図10） 円筒形の体部の底に円錐状の三足を付けたもので、外側面には大きく轆轤成形痕が残されている。釉薬は灰釉が外側面から口縁部に施され、底面及び三足は無釉である。

（3） 登窯III期（1655−1687年・明暦〜貞享年間）

肥前国における磁器生産が軌道に乗り色絵磁器の焼成も開始され、また、京焼においても色絵陶器が焼成されるようになると施釉陶器の生産地として中心的な位置を占めてきた尾張の窯業にも陰りが見え始めるようになった。尾張瀬戸窯の窯業は尾張徳川家が保護政策を行ない、瀬戸山離散状態から脱却してもとの生産規模に戻ろうとしていた時期にさしかかった状況であった。肥前国と京焼の色絵陶磁器の生産が開始され、奇麗な色彩豊かな器物の流行がおとずれると、瀬戸窯は美濃窯との交流による窯業技術によって復興を果たしてきたが、時代の動きに付いていけない時代遅れの陶器生産であることを知ることとなった。そのため、瀬戸窯は復興まもなくして生産活動の転換を迫られる時期にかかりながら、登窯Ⅱ期以来の生産を継続している状態であった。

a 碗類

天目茶碗A（第3図1） 器高が少し低くなり大形化する以前の大きさに戻り、その分だけ内面底部が広く丸碗的な形状に変化する。胴部の径が口径よりも大きくなり、口縁部の屈折も直線的となる。底部は高台の高さが登窯Ⅱ期からのままで、轆轤回転篦削り成形後に撫で仕上げが施されている。

天目茶碗B（第3図2） 新しく平碗形の天目茶碗が出現する。この平碗形は口縁部の立ち上がりの高さが短く、底部の高台の篦削りが内反り高台となり、高台脇の削りも鋭角的に削られ、鉄銹の化粧掛けが施されているもので、全く新しい造形である。

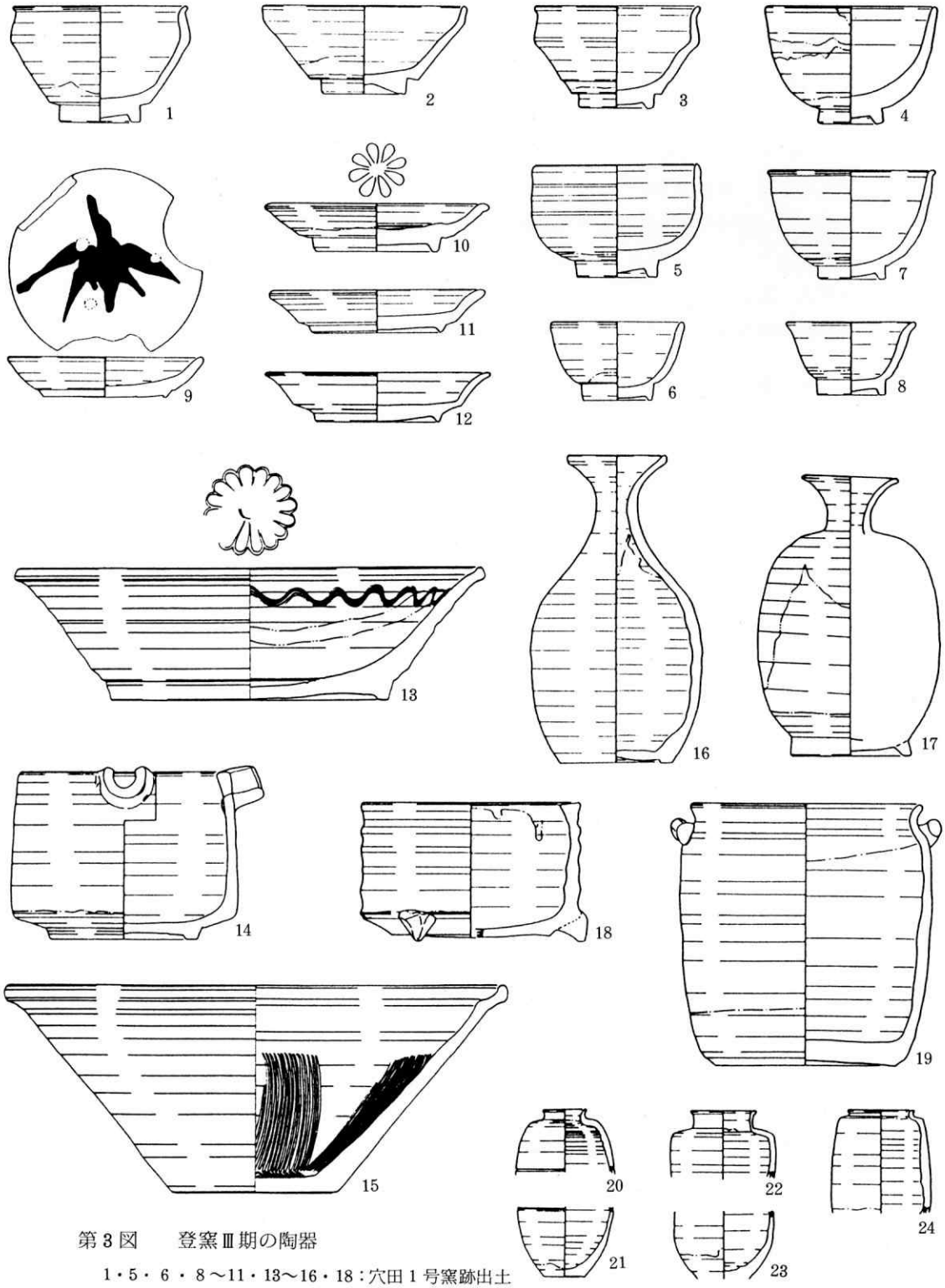
段付白天目茶碗（第3図3） 器高がやや低くなり口縁部の立ち上がりの屈折が顕著となる。底部は轆轤篦削り成形の後に撫で仕上げが施され、高台の端面に撫で仕上げによる僅かな溝ができるようになる。

鉄釉丸碗A（第3図4） 口縁部で開いた器形となり、全体が厚手で、造形的に退化したものである。

灰釉丸碗A（第3図5） 外側面の轆轤成形水引き痕が僅かな凹凸となり、おとなしい造形のものに変わる。高台は轆轤篦削り成形後に撫で仕上げが施され、高台の端面に僅かな溝ができる。

灰釉丸碗B（第3図7） 口縁端部が外反する腰丸の碗で口縁部でやや開いた器形となる。全体が薄造りのものとなり、丁寧な造形のものとなる。

灰釉小杯（第3図6. 8） 丸碗形のものと口縁部が外反するものとがある。底部は轆轤削り出し高台でほぼ同様の整形である。



第３図　　登窯Ⅲ期の陶器

1・5・6・8～11・13～16・18：穴田１号窯跡出土
4・7・12・17・19～24：瓶子窯出土
2：窯町Ｄ窯跡出土
3：日面窯跡出土

b 皿類

長石釉鉄絵皿（第3図9）やや小形のものとなり、上面には圏線なしの鉄絵蘭竹文が描かれている。底部は轆轤篦削り成形された低い高台となる。釉薬は長石釉が全体に施され、内面には円錐ピン跡がある。

灰釉内ハゲ皿（第3図10） 全体の成形が粗雑となり、高台が断面三角形状になる。上面の輪状の突帯部は施釉後に掻き落され、底部は露胎である。

灰釉稜皿（第3図11.12） 新しく全面施釉のものが出現する。美濃窯の御深井釉の器種の影響が認められるもので、腰部に稜を残して口縁部に大きく外反する器形である。

c 鉢類

鉄釉片口（第3図14） 体部は筒形を呈し、底部の高台が幅広く台形状である。

鉄釉擂鉢A（第3図15） 口縁部が発達して屈折し、端部が肥厚して縁帯を形成する。

d 壺類

双耳壺（第3図19） 円筒形の体部に僅かに絞って肩部を造り、短い外反する口縁部となる広口の壷で、肩部に丸紐の耳が付けられている。腰から底部は轆轤篦削り成形され、平底である。

e 瓶類

鉄釉徳利A（第3図16） 口縁部が大きくラッパ口に開き、体部が縦長くなる。底部は削り込み高台である。

鉄釉徳利B（第3図17） 胴長の球形の体部に口縁部が大きく開く頸の短い口頸部が付き、底部を張り付け高台とする造形である。底部は鉄銹が化粧掛けされている。全く新しい器形のものである。釉薬は肩部に二重掛けにより金結晶状に呈色しているものが多い。

f その他

鉄釉香炉A（第3図18） 円筒形の器高の低い三足のもので、外側面には櫛目波状文が施されている。三足は小さく、底部の外周に両端を指で押しつけた形状のものである。

茶入（第3図20～24） 茄子形のものや肩衝形のものがある。薄手で轆轤成形は丁寧である。

3 江戸前期の瀬戸窯

(1) 瀬戸窯の焼成品について

江戸時代元和年間に入ると、瀬戸窯は尾張藩の保護政策もあり、瀬戸山離散の状態から次第に復興する兆しが見え始めてくる。瀬戸山離散後の最も古い窯跡として大窯形式ではあるが赤津B窯跡が確認され、その後、寛永年間には連房式登窯が導入され、旧赤津村では瓶子窯跡、旧水野村では穴田窯跡群で生産が確認されるようになった。

瀬戸窯における焼成器種は美濃窯と比較してみると、「織部陶器」の一群が焼成されていないことがまず指摘できる。登窯Ⅰ期の慶長10年代から元和年間にかけての時期は、美濃窯では盛んに「ゆがみ」を造形の基本とし、「織部陶器」生産の最盛期である。しかし、瀬戸窯ではそれに対応できる窯跡資料が確認されていない。一番編年的に古い赤津B窯跡の焼成品でも登窯Ⅰ期の後半期に比定できるのみである。そのことは尾張藩による保護政策が打ち出された慶長15年以降であることも符合する結果となっている。

瀬戸窯は焼成品の中の長石釉小皿・長石釉大鉢・黄瀬戸大鉢などは美濃窯と関連性が認められ

るが、織部陶器の特徴の一つである銅緑釉の使用は黄瀬戸大鉢に限られている。また、志野織部の特徴である鉄絵は長石釉大鉢と長石釉小皿に認められる。いずれも轆轤成形された日常用の鉢・皿類であり、意識的には織部陶器の枠外の製品であると考えられる。

瀬戸窯の特徴は織部陶器に替わって、茶陶として復権するかのように天目茶碗と茶入が再び主力製品として扱われるようになることである。天目茶碗は段付のものを含めて大形のものが登場し、全体の轆轤成形は薄造りで丁寧に造られ、大窯期のものとは別物である。

また、茶入も轆轤成形は薄造りで丁寧であり、肩衝形や棗形や茄子形などの形式に合った器形のものが造られている。

施釉方法では、天目茶碗や茶入の釉薬は鉄釉の上に灰釉を二重掛けに散らして釉変わりの景色を造っており、美濃窯では中馬街道筋の窯に同様の様相が強く認められる。特に茶入は美濃窯の中でも中馬街道筋の窯と強い交流が考えられる。

御深井釉の製品は瀬戸窯では敷瓦に特徴的に使われ、刻文に呉須絵（染付文様）を伴っている。御深井釉の使用は一部の器種に限られ、その他の器種には小皿や瓶類に透明性の強い灰釉が使われ、美濃窯が青磁写しを狙ったような意図を瀬戸窯では感じられない。

透明性の強い灰釉製品の中で灰釉丸碗A、同Bは美濃窯にも認められない新しい器種であり、灰釉徳利は染付磁器のものと造形的に類似しており、影響を受けているものと考えられる。

(2) 窯体及び焼成技法について

窯体構造については美濃窯の土岐川以北の久尻・定林寺の窯と中馬街道筋の大川窯を瀬戸窯の穴田のそれと比較すると、中馬街道筋と瀬戸窯とが近い類似点の多いことを知る。

美濃窯では、匣鉢詰めのための窯道具は長石釉の器種には16世紀代より円錐ピンが使用されている。また、御深井釉の器種を中心に三足トチが使われ、大形鉢（通称笠原鉢）の焼成には三足トチが使われている。黄瀬戸大鉢の焼成に瀬戸窯の赤津B窯跡（大窯）では団子トチが使われていたが、穴田窯（連房式登窯）では三足トチの使用が認められ、美濃窯の技術と思われ三足トチが使用されている。また、瀬戸窯では笠原鉢の焼成も行なわれており、旧赤津村内の窯跡で確認されて、三足トチが使用されている。

このように一部分ではあるが登窯Ⅱ期の段階で美濃窯との交流を示す事例が認められる。瀬戸窯と美濃窯の年代的、器種的、焼成技法的に相違点と両者の交流が認められる。

瀬戸山離散から瀬戸窯がどのように何を目指して復興したのかを探っていくと、瀬戸窯は自立の復興ではなく尾張藩の保護の下に生産を再興したことから、その生産体制が藩主導のもとに焼成品にまで及んでいるものと考えられる。それは江戸前期（登窯Ⅰ～Ⅲ期）の瀬戸窯製品が同時期の消費遺跡から特徴的に出土していることから指摘できる。この17世紀前半代から後半代にかけての遺跡は徳川幕府に関連するものが多く、尾張藩の瀬戸窯振興策とのつながりを考えさせるものとなっている。

注1　拙書「尾張陶磁(1) ― 近世初期の瀬戸物生産 ―」（「愛知県陶磁資料館研究紀要」9）　1990、同「尾張陶磁(2) ― 近世の瀬戸物生産 ―」（「愛知県陶磁資料館研究紀要」10）　1991。

注2　拙書「尾張陶磁(2) ― 近世の瀬戸物生産 ―」（「愛知県陶磁資料館研究紀要」10）　1991。

注3～5　藤澤良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」（「瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要」Ⅴ）　1986。

注6　滝本知二「改訂増補瀬戸ところどころ今昔物語」　大瀬戸新聞社　1956。